

群 教 七	G06 - 03
	平16.221集

集団的な運動領域における個々の能力 を高め、生かす保健体育科指導の工夫 学習場面に応じた学び合い活動を取り入れて

特別研修員 宮崎 勝義 (太田市立西中学校)

《研究の概要》

本研究は、集団的な運動領域の学習に、学習場面に応じた学び合い活動を取り入れることによって、個々の能力を高め、生かせるようにしたものである。具体的には、バレーボールの学習において、自己の課題解決を目指す活動とその成果をチームで生かす活動を計画的に行うことにより、個々の能力を高め、生かすことができるよう指導を工夫した。

【キーワード：保健体育 - 中 集団的な運動 バレーボール 学び合い活動】

主題設定の理由

これまで保健体育の授業では、課題解決的な学習を進めてきた。その結果、生徒は自己の課題や目標を意識して主体的に活動でき、7割の生徒が「達成感が味わえる」「がんばろうという気になる」という感想をもつようになった。また、互いに教え合ったり、励まし合ったりすることによって学習意欲が増し、よりよい解決方法が導き出せると考え、グループ活動を積極的に取り入れてきた結果、一層協力し合いながら運動を楽しむようになった。

しかし、活動の様子や学習カード等から学び方を考察すると、考えたり工夫したりといった、深まりのある学習は十分できていなかった。したがって、学び合う活動も、互いに見合うことはできていても、よりよい解決にむけて意見を言い合うまでは行われず、ゲームを楽しむまでにとどまっていたと感じる。これは、一人ひとりが何を解決していくのかという課題のとらえ方が曖昧であったり、どのような練習方法が適しているのか判断しかねたりしていたことが一つの要因であると考える。また、チームとしての課題ばかりにとらわれ自己の課題解決に十分時間をかけられなかったことや、特定の生徒が一方的に進めてしまい、それぞれがもつ思いや願いが実現できないことから、達成感や充実感を十分味わえない生徒もいた。このような現状から、自己課題の解決にむけて学び合える場と、チームとしての学び合い活動を充実させる場を設定する必要性を感じた。

そこで、自己の課題解決を目指す活動とその成果をチームで生かす活動といった学習場面に応じた学び合い活動を計画的に取り入れれば、個々の能力を高め、生かすことができると考え、本主題を設定した。

研究のねらい

集団的な運動領域の学習において、学習場面に応じた学び合い活動を取り入れることにより、個々の能力が高まり、その成果を生かせることの有効性を実践を通して明らかにする。

研究の見通し

- 1 つかむ過程において、チームでの試しの運動や話し合いによる学び合い活動を取り入れれば、チームの実態や課題から自己の役割を理解し、自己の課題をつかめるであろう。
- 2 追求する過程において、課題別グループとチームでの学び合い活動を組み合わせて取り入れれば、課題解決に結びつく適切な練習により成果と課題の確認ができ、個々の能力を高められるであろう。
- 3 まとめる過程において、ゲームや振り返りによる学び合い活動を取り入れれば、高まった個々の能力を認め合うことができ、チーム活動において生かせるであろう。

研究の内容と方法

1 研究の内容

(1) 「能力を高め、生かす」について

「能力」とは、その種目において身に付ける技能と、「楽しそう」「うまくなりたい」「がんばりたい」といった関心・意欲・態度、課題解決を図るための方法や手段を導き出すための思考力・判断力ととらえる。

そして、チームや自己の課題解決にむけて自己の役割を理解し、課題に合った場で仲間とともに学び合うことがこの能力を高めるために有効であると考え。また、練習の成果と課題を確認し、さらに課題解決を図るなかで高まった個々の能力を発揮し、認め合えたとき、能力を生かすことができたと考える。

(2) 「学習場面に応じた学び合い活動」について

生徒は、チームや自己の課題解決を目指す「等質チーム」及び「課題別グループ」の二通りの集団で学習を行う。

「等質チームの活動」とは

生徒を技能面から各チーム均等に分けて構成した等質チーム（以下、チーム）において、チームの実態からチームの課題を設定し、その解決にむけて活動することととらえる。

この活動では、まず、チームにおける個々の役割を明確にし、自己の課題をつかむ。そして、その役割や課題を意識しながらチーム練習をすることにより、チーム力のアップを図る。

「課題別グループの活動」とは

個々の課題が同一及び類似している者により構成した課題別グループ（以下、グループ）において、「苦手なので克服する」「できるけれどもさらに伸ばす」ことを目指して活動することととらえる。

この活動では、解決したい課題が同一及び類似していることから、仲間とともに改善のポイントを絞り込んだ具体的な練習や場の工夫ができると考える。また、得意な生徒が不得意な生徒にアドバイスすることもでき、生徒は学び合うことにより、自分の課題解決のヒントを得られると考える。さらに、教師は、生徒一人ひとりの課題を明確に把握することができるため、支援も適切に行えると考える。

この二つの学び合い活動を計画的に組み合わせることにより、個々の能力を高めるとともにその能力をチームで生かすことができると考える。

この活動を図1のような学習過程に位置づけることとする。

図1 学び合い活動を取り入れた学習過程

	3時間			7時間					1時間
	1	1	1	2	1	1	2	1	1
	課題をつかむ			課題を追求する					課題をまとめる
0	オリエンテーション	チーム対抗試合	チーム活動	チーム活動	チーム活動	チーム対抗試合	チーム活動	チーム活動	チーム対抗試合
50	チーム編成	チーム活動	グループ編成	グループ活動	チーム活動	チーム活動	グループ活動	チーム活動	チーム活動

2 研究の方法

研究の見通しに基づき、次のような計画で授業実践を行い、検証する。

(1) 授業実践計画

対象	太田市立西中学校 3年3、4組男子(3組17名 4組17名 計34名)		
単元	バレーボール	期間	平成16年10月 11時間予定

(2) 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	つかむ過程において、チームでの試しの運動や話し合いによる学び合い活動を取り入れることは、チームの実態や課題から自己の役割を理解し、自己の課題をつかむうえで有効であったか。	・試しの運動・つぶやきや発言等の観察 ・学習カードの記述内容の分析
見通し2	追求する過程において、課題別グループとチームでの学び合い活動を組み合わせて取り入れることは、課題解決に結び付く適切な練習により成果と課題の確認ができ、個々の能力を高めるうえで有効であったか。	・練習の観察・つぶやきや発言等の観察 ・評価カード等を使った話し合いの観察 ・学習カードの記述内容の分析
見通し3	まとめる過程において、ゲームや振り返りによる学び合い活動を取り入れることは、高まった個々の能力を認め合うことができ、チーム活動において生かすうえで有効であったか。	・試しの運動・つぶやきや発言等の観察 ・学習カードの記述内容の分析 ・評価カードの記述内容の分析

(3) 抽出生徒

A	運動への取組はまじめだが、技能はあまり高くない。また、授業では、意見もあまり出さず、受け身的な学習ぶりとなっている。同じ課題の者同士のグループ練習において、意見を言い合い、練習をし合い、成果を認め合うことで積極的な活動につながり、能力が高められ、生かせるようにしていきたい。
B	運動に対して積極的で、チームをまとめようとする意欲や力もあり、技能も高い。しかし、友達に欠点や思ったことなどを指摘してあげることはあまりしない。他者にも目を向け、特に同じ課題の者に指摘することで自分の力の向上にもつながり、より上のレベルをめざしながら能力が高められ、それを生かせるようにしていきたい。

研究の展開

1 単元の考察、目標及び評価規準

単元の考察	バレーボールは、ネットを境にして相対する二つの集団がレシーブ、トス、スパイク、サービスなどを用いて攻防を展開し、得点を競い合う集団スポーツである。攻防の仕方を工夫し、ラリーを続けた相手の集団との勝敗を争ったりすることを楽しむことがある。 本単元では、自己の課題解決を目指す活動とその成果をチームで生かす活動といった学習場面に応じた学び合い活動を計画的に取り入れることにより、個々の能力が高まり、生かせ、それによりバレーボールの楽しさが一層増すと考える。	
目標	集団や自己の課題の解決にむけ、攻め方、守り方などを工夫しながら練習やゲームができる。 集団での自己の責任を果たし、協力して練習やゲームができるとともに、勝敗に対する公正な態度をとることができる。また、コートや安全確認など、安全や健康に留意して練習やゲームができる。	
評価規準	おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
	運動や健康・安全への関心・意欲・態度	運動や健康・安全への関心・意欲・態度
	運動や健康・安全についての思考・判断	運動や健康・安全についての思考・判断
	所属する集団や自己の課題の解決をめざして、練習方法や作戦を工夫している。 話し合いや相互評価などの見合う活動を生かしながら、フォームの改善・技能の向上にむけて考えたり判断したりしている。	所属する集団や自己の課題の解決をめざして、進んで練習方法や作戦を工夫している。 話し合いや相互評価などの見合う活動を生かしながら、フォームの改善・技能の向上にむけて進んで考えたり判断したりしている。
	運動の技能	

練習で課題解決を目指し、技能を高めることができる。 身に付けた技能を試合で生かしたり、所属する集団の力の向上や勝利に貢献したりすることができる。	練習で課題解決を目指し、進んで技能を高めることができる。 身に付けた技能を積極的に試合で生かしたり、所属する集団の力の向上や勝利に貢献したりすることができる。
種目の特性や学び方、技術の構造や合理的な練習方法を理解している。 競技や審判の方法を理解し、知識も身に付けている。	種目の特性や学び方、技術の構造や合理的な練習方法を十分理解している。 競技や審判の方法を理解し、知識も十分身に付けている。

2 指導と評価の計画（資料編参照）

研究の結果と考察

1 つかむ過程において、チームでの試しの運動や話し合いによる学び合い活動を取り入れることは、チームの実態や課題から自己の役割を理解し、自己の課題をつかむうえで有効であったか

チームの実態を知るために試しの運動として試合を行い、試合後、チームごとに話し合いをもった（資料1）。

まず、チームごとに試合を振り返り、自チームの長所・短所をあげながら、実態をつかんだ。Aは、まじめに聞いていたが意見は言わず、「何か思いつくことがあるか。自分のポジションからみて感じたことについて考えて」と助言すると、考えている様子だった。Bは、話し合いに積極的に参加し、「サーブがよかった」「レシーブがうまくない」など、意見をたくさん出したことにより、チームや個々の実態が確認でき、チーム理解につなげようとしていた。

各チームでは、試合の状況を振り返り、「俺はスパイクが得意だからアタッカーになる」「守りが大切だから はレシーバーかな」など役割についても積極的に話し合っていた。

各チームとも実態をもとに、チーム課題（資料2）について話し合い、練習内容等について考えた。その後、「チーム課題を解決するために何が必要か」と質問したところ、「基本技術」「練習」「個人のがんばり」「役割」といった答えが返ってきた。そこで、これからの学習でチームのために個人課題も解決していくことの大切さを確認した。

Aは、チームの話し合いの中で進んで役割を決めることができなかつたので、「チームのために何ができるか。技術を高めたいものから考えて」と助言をしたところ、自分の考えや他者のアドバイスからレシーブグループを選んだ。Bは、「 はセッターがいいんじゃないか。おれはレシーブだ」と、自チームとしての自分の立場や技術、チームメイトの実態などを考慮ながらレシーブグループを選択した。

その後、自己の課題解決の意気込みを学習カードに記入した。Aは、課題を「ボールを積極的に拾い、狙ったところへとばす」とし、「ボールに食いついていく」という意気込みを書いた。Bは、課題を「とにかく拾う+フォロー」とし、「気合です。痛みに耐えます。」という意気込みを書いた。全体として、チームの状況から自分の役割を決め、それぞれが自分に合った課題をつかむことができた。

このことから、チームでの試しの運動や話し合い活動による学び合いを取り入れることは、チームの実態や課題から自己の役割を理解し、自己の課題をつかむうえで有効であったといえる。

資料1 話し合い



資料2 各チームの課題

チーム	課題
1	レシーブの技術の向上
2	積極的にボールを追う
3	自分の苦手なことをなくす
4	ボールをアタッカーまでつなぐ

2 追求する過程において、課題別グループとチームでの学び合い活動を組み合わせると取り入れれば、課題解決に結び付く適切な練習により成果と課題の確認ができ、個々の能力を高めるうえで有効であったか

初めてのグループ活動では、どのグループもボール慣れや動きを思い出すような練習であった。Aは、友達と対面パスを行い、ほとんど会話もなくボールを追い続け、ミスもやや多かった。そこで、「互いに気をつけるところをよく見て、指摘し合おう」と支援した。しかし、あまり変化は見られなかった。Bは、3人組で初歩的なレシーブ練習の後、近距離のサーブカット練習を行った。楽しそうに行っていたが、アドバイスを行う様子がないため、「見て感じたことを言ってあげて」と声をかけた。すると、自信なさそうではあるが、アドバイスし始めた。

グループ活動後のチーム活動では、グループ活動で個々に学んだ基本技術を生かしながら、レシーブからアタックまでの三段攻撃を目標としたコンビネーション練習を行うチームもあれば、パス、サーブ練習など、グループ活動で行った練習内容を取り入れ、基本を重視した練習を行うチームもあった。練習後のチームの話合いでは、Aは、発言はなかったが学習カードに自分の活動に対する反省や感想を記入していた(資料3)。一方、Bは、学習カードの記入も話合いも積極的で、「三段攻撃練習ではトスがうまく上げられた。サーブをうまく出してほしい」などの反省や意見を出していた。

資料3 反省や感想

月/日	集団	練習内容	反省・感想	評価
10/12	チーム			
	課題別	レシーブ	対面レシーブがあまりつづかない	C
10/19	チーム	三段攻撃	ボールをあまりひろいに行けなかった	C
	課題別	レシーブ	ボールをうまくとばすことができない	C
10/25	チーム	三段攻撃	自分の所へボールが来てうまくとばせなかった	C
	課題別	レシーブ	ねらった場所へボールをとばせた	B

2時間目のグループ練習では工夫が見られるようになった。練習内容をまとめた掲示物を参考に練習内容を検討し(資料4)、積極的に練習に取り組んでいた。

資料4 練習内容の検討



3時間目のチーム活動において、AとBが所属するチームは「基本を大切に」ということでパス練習に多くの時間を当てた。仲間に積極的にアドバイスや支援をする生徒や仲間のアドバイスや励ましを受け一生懸命に取り組んでいる生徒もいた。

4時間目には練習の成果を見るための練習試合を行った。キャプテンの指示「低く構えよう」の下、全員で構えたり、対戦チームの大きなかけ声を聞き、「俺たちもしっかり声をかけ合おう」と再確認したチームもあつたりと、チーム内でのコミュニケーションをよく図っていた。三段攻撃も最初の試合に比べ、多く見られるようになった。

5、6時間目になると、試合で思うようにできた喜びとできなかった悔しさから、チームのまとまりがよくなり、練習では大きな声を出して盛り上げ、仲間への声かけも積極的になった。また、「まだ腕を振りすぎている」「トスが流れている」などの指摘もし合えるようになってきた。グループ活動では、実践に近い練習内容を取り入れ、学習カードに「レシーブがうまくできるようになってきた。スパイクでいいミートができた」などの達成感を味わっている感想が多く書かれ、うまくなりたいという意気込みも一層強くなってきた様子うかがえた。

Aは、レシーブの際、足が左右に俊敏に動かせるようになり、ボールに食らいついていた。仲間と声をかけ合い、楽しんで練習している姿も見られるようになり、「少しだがアドバイスの仕方がわかったような気がする。練習も人並みにできるようになった。」という感想を書いた。技術が向上し、それが自分自身でも確認でき、基本練習、友達とのかかわる大切さを実感したようだ。Bは、仲間にアドバイスもできるようになり、「基本を確実に身に付けられた」という感想を書いた。

グループ活動では視点を絞った練習や見合う活動ができ、技能の向上を図ることができた。また、チーム活動では個々の能力が高まったことからそれぞれが自信をもってチームでプレーでき、存在感や一体感を感じながら連携プレーができた。これらのことから、課題別グループとチームでの学び合い活動を組み合わせて取り入れることは、課題解決に結び付く適切な練習により成果と課題の確認ができ、個々の能力を高めるうえで有効であったといえる。

3 まとめる過程において、ゲームや振り返りによる学び合い活動を取り入れることは、高まった個々の能力を認め合うことができ、チーム活動において生かすうえで有効であったか

練習の成果を試す試合の中で、個々が自分の役割を意識し、チームのために集中して取り組むことができた。三段攻撃を積極的に行ったり、励ましや激励の声を出したりし、全員が試合に参加している様子であった。試合後、多くの生徒が、「自分の役割もしっかりでき、楽しめた」「他人のことも気にしてできた」などの感想を言っていた。Aは、姿勢を低くしてボールに集中し、広範囲までボールを追いかける姿が見られた。レシーブの腕の出し方や体の向き方、スタンスの幅などの基本も練習当初に比べ、かなり上達した。「負けたが楽しかった。それなりにできた気がする。」という感想を書いた。また、仲間から、「ナイスレシーブ。ナイスファイト」

など声もかけられ、相互評価をし合った生徒からは向上を認める

資料5 Aへの評価

氏名	ボールの下に入る	ボールを正確に上げて	パスは正確に	ボールを高く	腕は振り過ぎない	思った通りにプレーできる
生徒1	A	A	A	B	C	C
生徒2	A	A	A	B	C	C
生徒3	A	A	A	B	C	C
生徒4	A	A	A	B	C	C
生徒5	A	A	A	B	C	C
生徒6	A	A	A	B	C	C
生徒7	A	A	A	B	C	C
生徒8	A	A	A	B	C	C

評価をされていた(資料5)。Bは、チームの中心としてボールを正確に上げていた。周りの仲間がミスをするときアドバイスをし、声を出して盛り上げたり励ましたりといった姿も見られた。「チーム内でもめることもあったが、まとまり、楽しくできた。」という感想を書いた。AとBが所属するチームは、対戦成績こそ勝ったり負けたりと最初のころとあまり変わらなかったが、「試合内容が向上した」とチーム全員が評価するほど攻撃も守備もかなり向上し、納得のいく試合ができたようだった。

これらのことから、ゲームや振り返りによる学び合い活動を取り入れることは、高まった個々の能力を認め合うことができ、チーム活動において生かすうえで有効であった。

研究のまとめと今後の課題

集団的な運動領域の学習に、自己の課題解決を目指すグループ活動とその成果を生かすチーム活動を学習場面に応じて取り入れることは、個々の能力を高め、ゲームに生かすうえで有効であった。特に、グループ活動では、視点を絞った、課題解決に結び付く適切な練習や見合う活動ができ、技能向上や個々の課題解決に大きく結び付いた。チーム活動では、身に付けた個々の能力を認め合い、ゲームで生かせることにつながった。

二つの活動の中で、練習や評価、話し合いなど様々な活動を行った。評価活動や話し合い活動は大切なことであるが、回数が多かったり時間をかけすぎたりしては、練習時間の確保に影響が出る。いかに、効果的に設定し、短時間で中身の濃い活動にするか、または練習にうまくかかわらせていくかが課題としてあげられ、今後、学習過程を検討・工夫していきたい。

